

ネロとキリスト教再考

ネロとキリスト教再考<sup>(1)</sup>

島 創平\*

## A Re-examination of the Question “Nero and Christianity”

SHIMA Sohei

Nero, the 5th Roman emperor, has often been regarded as a “tyrant”. He was the first persecuter of Christians in A.D. 64 when a major fire broke out in the City of Rome. Tacitus, the Roman historian, reports that in order to deny the rumour that Nero himself had ordered the fire to be set, Nero ascribed the crime to Christians and punished them cruelly. However, Tacitus also says that Christians were convicted not so much on the count of arson as for “hatred of the human race” (*Annales*, 15.44).

To consider the question why Christians were persecuted by Nero, we must depend mainly on the descriptions of Roman historians — Tacitus and Suetonius. These historians lived in the early part of the 2nd century, when the distinction between Christianity and Judaism had become more apparent. But in the days of Nero’s reign, the middle of the 1st century, the distinction was not so apparent. Christianity was regarded as a sect of Judaism. In *The Acts of the Apostles*, Christianity was called “the sect of the Nazarenes” by an anti-Christian Jew (*Acts*, 24.5).

On the other hand, early Christian missionary work caused division and discord among Jewish people and often provoked disturbance between people who accepted the Christian faith and those who rejected it. In the reign of Claudius, Jews were expelled from Rome because they often created disturbances at the instigation of “Chrestus” (Suetonius, *Claudius*, 24.4).

The Christian people of the Neronian days were thus regarded as a Jewish splinter group and troublemakers who often caused disturbances. Therefore, it is more accurate to view the persecution of Christians by Nero as persecution of a particular Jewish sect — “the sect of Nazarenes”.

キーワード：ネロ、キリスト教徒迫害、ナザレ人の分派

**Keywords** : Nero, persecution of Christians, the sect of Nazarenes

---

\* 東洋英和女学院大学 国際社会学部 教授  
Professor, Faculty of Social Sciences, Toyo Eiwa University

## 問題提起—ネロのキリスト教徒迫害についてのタキトゥスの記述の問題

第5代ローマ皇帝ネロ（54~68位）は、一般にいわれる「暴君」の典型と言われている。特にネロが史上初めてキリスト教徒を迫害した皇帝であることから、とりわけ欧米のキリスト教圏では、ネロ＝「暴君」というイメージが強調されてきたように思われる<sup>(2)</sup>。

このネロのキリスト教徒迫害は、64年7月18日夜に起こり、その後6日にわたり燃え続けたローマ大火事件と関連して論じられることが多いが、これは主として2世紀初めの歴史家タキトゥスの『年代記』15.38~44の記述に基づいている。タキトゥスによれば、この大火の際、ネロが放火犯であるという噂が流れ<sup>(3)</sup>、ネロはこの噂を打ち消すために、キリスト教徒に放火犯の罪を着せて処罰したという。すなわち、タキトゥスは次のように述べている<sup>(4)</sup>。

しかし、元首の慈悲深い援助も惜しめない施与も、神々に捧げた贖罪の儀式も、不名誉な噂を枯らせることができなかった。民衆は「ネロが大火を命じた」と信じて疑わなかった。そこでネロは、この風評をもみ消そうとして、身代わりの被告をこしらえ、これに大変手の込んだ罰を加える。それは、日頃から忌まわしい行為で世人から恨み憎まれ、「キリスト教徒（Christiani）」と呼ばれていた者たちである。この一派の呼び名の創始者であるクリストゥスなる者は、ティベリウスの治世下に、元首属吏ポンティウス・ピラトゥスによって処刑されていた。その当座は、この有害極まりない迷信も、一時鎮まっていたのだが、最近になって再び、この禍患の発生地ユダヤにおいてのみならず、世界中からおぞましい破廉恥なものがことごとく流れ込んで、もてはやされるこの都においてすら、猩蔽をきわめていたのである。

そこでまず、信仰を告白していた者が審問され、ついでその者らの情報に基づき、実

におびたしい数（*multitudo ingens*）が、放火の罪というよりむしろ人類敵視の罪で有罪とされた<sup>(5)</sup>。彼らは殺されるとき、なぶりものにされた。すなわち、野獣の毛皮をかぶされ、犬に噛み裂かれて倒れる。（あるいは十字架に縛り付けられ、あるいは燃えやすく仕組まれ）、そして日が落ちてから夜の灯火代わりに燃やされたのである。ネロはこの見世物のため、カエサル庭園を提供し、そのうえ、戦車競技まで催して、その間中、戦車駆者のよそおいで民衆の間を歩き回ったり、自分でも戦車を走らせたりした。そこで人々は不憫の念をいだきだした。なるほど彼らは罪人であり、どんなむごたらしい懲罰にも値する。しかし彼らが犠牲になったのは、国家の福祉のためではなく、ネロ一個人の残忍性を満足させるためであったように思われたからである（『年代記』15.44. 国原吉之助訳。一部訳文を改めた）<sup>(6)</sup>。

しかし、タキトゥスのこの記述については、従来から様々な疑問が出されてきた。まず第一に、このようにローマにおける大火とキリスト教徒迫害を結びつけているのはタキトゥスだけであり、彼より年少の歴史家スエトニウスは、大火とキリスト教徒迫害を別々に記述している。さらに後代のディオ・カッシウスは、ローマ大火については記述しているが、キリスト教徒迫害には全く触れていない。

第二に、とりわけ問題なのは、キリスト教徒に関するタキトゥスの記述は、ネロの時代である1世紀半ば頃というよりも、むしろタキトゥス自身の時代である2世紀初め頃の状況を反映しているように思われることである。すなわち、キリスト教はおおよそ30年頃にユダヤ教から成立したが、キリスト教がユダヤ教と明確に区別されるようになるのは、少なくとも1世紀後半以降、ユダヤ戦争により、サドカイ派をはじめとするユダヤ教内の諸分派がほとんど消滅し、唯一、律法を重視するファリサイ派のみが残り、ファリサイ派を中心にユダヤ教が再建さ

れる中で、キリスト教徒がシナゴグから追放されるようになってからのことである。それまでのキリスト教は、ユダヤ教内の一分派とみなされていた。たとえば使徒言行録では、イエルサレムでパウロを逮捕したユダヤ人がパウロをローマ総督に告発する場面において、キリスト教は「ナザレ人の一派」と呼ばれている（使徒言行録 24 章 5 節）<sup>(7)</sup>。

一方、タキトゥスの記述では、キリスト教徒は Christiani と呼ばれているが、この呼称が異邦人に受け入れられる時期は、保坂高殿氏によると、ウェスパシアヌス帝時代の 70 年代以降のことと考えられる<sup>(8)</sup>。またタキトゥスは、キリスト教の創始者は、総督ピラトゥスによって処刑されたキリストという人物であると説明している。すなわちここで、キリスト教はユダヤ教とは区別される新しい宗教であることが認識されている<sup>(9)</sup>。

さらにタキトゥスは、ネロの迫害により「実におびただしい数（multitudo ingens）」の信者が処刑されたと述べているが、これは修辭的な表現で、保坂氏は、当時のローマ教会は、「信徒相互が顔見知りできるほど小規模であったに相違ない。ネロの犠牲者は多く見積もって数十名ほどではないだろうか」と推測する<sup>(10)</sup>。

以上のように、タキトゥスの記述におけるローマのキリスト教信者は、ネロの時代である 1 世紀半ばよりも、むしろタキトゥスが『年代記』を執筆した 2 世紀初め頃一すなわち、キリスト教とユダヤ教の区別が異邦人世界でも認識されるようになった時期の状況を反映していると言えよう。ネロの時代には、特に部外者にはユダヤ教とキリスト教の区別は困難であったであろう。また、キリスト教徒自身、大多数は自分たちはユダヤ教内の一派であると自覚していたであろう。

## ネロとユダヤ教—ヨセフスの証言

このように、当時のキリスト教はユダヤ教とは未分化であったとするならば、それではネロ

は、そもそもユダヤ教に対しては、どのような姿勢を取ったのだろうか。この問題を考える上で、ここでネロとほぼ同世代のユダヤ人の歴史家である、フラウィウス・ヨセフスの記述を参照したい<sup>(11)</sup>。

まず第一に、『ユダヤ古代誌』20.189~195 に次のような記述がある。これは 61 年頃の出来事で、イエルサレム神殿の祭司たちが、当時ユダヤを統治していたアグリッパ 2 世が高台にあった宮殿から神殿の中をのぞき見できないように、高い壁を築いたことから、ローマ総督フェストゥスがこの壁を取り壊すように命じたので、ユダヤ人たちは皇帝ネロに使節を送り、壁を取り壊されないように懇願した。ヨセフスによれば、ネロは「彼らの訴えの一部始終を聞いた後、彼らの取った行動を不問に付したばかりか、さらにその建物はそのまま残しておくことまで許した。彼はユダヤ人のために弁護した宗教心のある（theosebês）妻ポッパエアに好意を見せたのである（『ユダヤ古代誌』20.195. 秦剛平訳）<sup>(12)</sup>。」

次に、ヨセフスの『自伝』13~16 を参照したい。これはヨセフスが 26 歳の時、ローマ大火と同年の 64 年の出来事であるが、ヨセフスは、ローマ総督フェストゥスにより、不当にローマに拘留されていたユダヤ人の祭司たちの釈放を願うため、ローマを訪れて、ポッパエア・サピナと面会し、釈放を懇願した。話はうまく進み、彼はその上ポッパエアから莫大な贈り物までもらって、帰国することができたという<sup>(13)</sup>。

このように、ネロは彼の妻ポッパエア・サピナの影響により、ユダヤ教に好意的な姿勢を取ったというヨセフスの記述について、果してこれが事実であるかどうか、疑問を呈する研究者もいる。特に問題なのは、ここでポッパエア・サピナが theosebês と呼ばれていることである。theosebês とは、「神を畏れる人」の意味で、これは特にユダヤ教信仰を受け入れながら、例えば男性ならば割礼を未だ受けていないといったように、完全にユダヤ教信徒にはなっていない人一すなわち、ユダヤ教の「半改宗者」を指

す言い方でもある。それゆえ、ポッパエアはこうしたユダヤ教の信者であったゆえに、ネロは彼女を通じて、ユダヤ教に好意的であったというようにも考えられる<sup>(14)</sup>。

他方、タキトゥスの記述によれば、ポッパエアは野心的な女性で、ネロをそそのかして母を暗殺させ、さらにネロの最初の妻オクタウィアの離婚と処刑にも関わっていたと言われている<sup>(15)</sup>。彼女はまた占星術に熱心であり<sup>(16)</sup>、また、63年に彼女がネロとの間に娘を生んだ時、ポッパエアには「ユノ・ポッパエア・アウグスタ」の称号が贈られ<sup>(17)</sup>、死後はネロにより神格化されている<sup>(18)</sup>。このように、彼女は厳格な一神教であるユダヤ教徒とは矛盾するという主張もある<sup>(19)</sup>。

しかし当時のユダヤ教と異教との関係は、特にディアスポラのユダヤ人の世界においては、必ずしも全く相互排他的な関係であったわけではない<sup>(20)</sup>。例えば、当時のローマ人の中には、完全なユダヤ教信者ではないが、ユダヤ教のシナゴグを建設したり、ユダヤ教徒の後援者になったりする者もいた<sup>(21)</sup>。このような例として、ここで小アジアのアクモニアで出土した碑文(CH716)を参照したい<sup>(22)</sup>。これはおそらく後1世紀のものと推定される。

ユリア・セウエラにより建てられた建物(シナゴグ)を、終身のシナゴグの長プブリウス・テュロニオス・クラドスと、シナゴグの長ルキウスの子ルキウスと、アルコンのプブリウス・ゾティコスが、彼ら自身の基金と彼らが供託した金により修復した。そして彼らは、壁画と天井を寄進した。そして彼らは窓を補強し、他のすべての装飾を作った。それゆえシナゴグは、彼らのシナゴグへの徳高い行いと心遣いのゆえに、金の盾で彼らを讃えた<sup>(23)</sup>。

この碑文で言及されているユリア・セウエラは、ローマ貴族の女性で、当地の皇帝礼拝の上級祭司を務めた。それゆえ彼女は恐らくユダヤ

教徒ではないが、ユダヤ教に好意を持ち、シナゴグを寄進するなど、ユダヤ人のパトロンのような存在であったと考えられる<sup>(24)</sup>。

ポッパエア・サピナも、ユリア・セウエラと同様な立場にあったのではないだろうか。彼女が実際にユダヤ教の改宗者であったかどうかは確かではないが、少なくとも彼女がユダヤ教徒に好意を持ち、その有力な後援者であったことは確かであろう<sup>(25)</sup>。また、彼女はヨセフスのようなファリサイ派や、祭司階級であるサドカイ派から、当時のユダヤ教の内情を知ることができた可能性もある。

以上のように、ネロが彼の妻ポッパエアの影響からユダヤ教には好意的であったとするならば、なぜネロは、64年の大火の際には、未だユダヤ教の枠内にあったキリスト教徒に放火犯の罪を着せて処刑したのだろうか。当時ユダヤ教とキリスト教は、異教の側から見て、どのように区別されたのであろうか。

そこで次に、当時のキリスト教側の視点から、この問題について考えてみたい。

## 初代キリスト教会の伝道活動—パウロの「異邦人伝道」の問題

先に述べたように、キリスト教はまずユダヤ教の一分派として成立し、初代教会の時代には、両者はまだはっきりと分かれてはいなかった。それでは当時のユダヤ教内において、最初期のキリスト教はどのような活動を行ったのだろうか。この問題を考える上で、ここではパウロの伝道活動について考えてみたい。

一般に、初代教会のキリスト教伝道活動については、「ペトロには割礼を受けた人々に対する福音が任されたように、わたし(パウロ)には割礼を受けていない人々に対する福音が任された(ガラテヤの信徒への手紙2章7節)」とあるように、イエルサレム教会の使徒たちはユダヤ人に対する伝道を、パウロは異邦人(≠非ユダヤ人)に対する伝道を目指していた、というように理解される傾向があるように思われ

る。

しかし、使徒言行録によれば、パウロの伝道活動は、決して初めから異邦人だけを対象としていたわけではない。そこで、使徒言行録の中のパウロの伝道活動のパターンの一例として、ここでパウロの第一回伝道旅行（47~48年頃）におけるイコニオン伝道の記事（使徒言行録14章1~7節）を参照したい。

イコニオンでも同じように、パウロとバルナバはユダヤ人の会堂に入って話をしたが、その結果、大勢のユダヤ人やギリシア人が信仰に入った。ところが信じようとしないうダヤ人たちは、異邦人を扇動し、兄弟たちに対して悪意を働かせた。(…)町の人々は分裂し、ある者はユダヤ人の側に、ある者は使徒の側についた。異邦人とユダヤ人が、指導者と一緒になって二人に乱暴を働き、石を投げつけようとしたとき、二人はこれに気付いて、リカオニア州の町であるリストラとデルベ、またその近くの地方に難を避けた。そしてそこでも福音を告げ知らせていた（新共同訳、一部省略）。

この記述から、次の2点が明らかにされる。

まず第一に、パウロの伝道活動は、「ユダヤ人の会堂（＝シナゴグ）」で開始されたということである<sup>(26)</sup>。すなわち、パウロの「世界伝道」は、必ずしも最初から異邦人のみを対象としていたのではなく、本来は各地のディアスポラ・ユダヤ人が第一の対象であった。異邦人については、元々シナゴグに出入りしていたユダヤ教改宗者あるいは半改宗者だけがパウロの伝道に接し得たのであり、その意味で、異邦人に対する伝道は、初めは二義的あるいは付随的なものであった。パウロの伝道がユダヤ人から拒否され、彼がシナゴグに出入りできなくなった後に、初めてパウロは改めて異邦人への伝道に向かうのである<sup>(27)</sup>。これについて、イエルヴェルという研究者は、「パウロはまず第一にユダヤ人に対する宣教者である。そしてただ

この宣教に付随的に結合された形で、異邦人の宣教に向かっているのである」と述べている<sup>(28)</sup>。

それゆえ、パウロの「異邦人伝道」は、むしろ「異邦人世界伝道」であり、その伝道対象はまず第一にユダヤ人であり、異邦人は二義的であった。

第二に、パウロの「世界伝道」は、各地に分裂や抗争、騒乱を引き起こした。先に引用したイコニオンでも、パウロの宣教は人々を分裂させ、彼は身の危険にさらされるが、イコニオンより前に訪れたピシディア州のアンティオキアでも、またイコニオンに続いて訪れたリストラでも、パウロの伝道活動は現地の人々の分裂や騒乱を引き起こしている<sup>(29)</sup>。これに関してイエルヴェルは、「当時のユダヤ人は、キリスト教の福音を拒否したのではなく、この問題に関して分裂したのである」と述べている<sup>(30)</sup>。

以上のように、パウロの「異邦人世界伝道」が示すように、初代キリスト教会の伝道活動はしばしば、その宣教をめぐるユダヤ人の間の、あるいは現地の異邦人も含む人々の間の分裂や抗争、社会混乱を各地に引き起こした。

以上の2点を念頭において、我々は次の問題に移りたい。

## ローマのキリスト教—「クレストウスの扇動」とは？

パウロは第二回伝道旅行（49~52年頃）中にコリントを訪れ、そこで最近ローマからコリントに来た、プリスキラとアキラというユダヤ人夫妻と出会う。彼らがローマからコリントに来たのは、「クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるように命じた（使徒言行録18章2節）」からであった<sup>(31)</sup>。これは50年秋ごろのことと推定される。

クラウディウス帝時代にユダヤ人がローマから追放されたことは、ローマ側の史料からも確かめられる。すなわち、スエトニウスの『クラウディウス伝』25.4では、「彼（クラウディウス）



は、ユダヤ人たちを、クレストゥス (Chrestus) の扇動により、絶えず騒乱を起こしていたので、ローマから追放した」と述べられている<sup>(32)</sup>。このクレストゥスという名について、いわゆるキリスト (Christus) とは綴りが違うことから、イエス・キリストとは無関係の人物であるという説もあるが<sup>(33)</sup>、多数説はこれをイエス・キリストと解釈し、ローマのユダヤ教徒とキリスト教徒が衝突し騒乱が起きたため、皇帝の勅令により、騒ぎを引き起こした者たちが追放されたと推定する<sup>(34)</sup>。この時期については49年頃とも考えられ、先にあげた聖書の記述とも大体一致する。

このように、キリスト教が伝えられた他の諸都市と同様、1世紀半ばのローマにおいても、恐らくキリスト教信仰をめぐる、ユダヤ人の間で衝突、騒乱があったということは、なぜネロの時代にキリスト教徒だけが迫害されたのか、という問題に対する一つの手掛かりを我々に提供するものであると言えよう。

## まとめと結論

今まで検討してきたことをまとめると、以下のように考えられる。

1世紀半ばのネロの時代には、ユダヤ教とキリスト教は、まだはっきりと分化しておらず、キリスト教はユダヤ教内の一分派とみなされていた。それゆえ、異教側からは、両者の区別はつきにくかったと思われる。

一方、キリスト教が地中海世界各地のディアスポラ・ユダヤ人の間に伝道されると、その信仰をめぐる、キリスト教を受け入れる側と拒否する側の対立、抗争や騒乱が起こるようになった。ローマにおいても、クラウディウス帝の時代に、こうした騒乱が原因で、ユダヤ人が首都から追放されるような事態が起こっていた。

それゆえ、ネロ時代のローマにおいては、ユダヤ人の中でも「イエス・キリスト」を信じる一派は、社会に分裂、抗争や騒乱を引き起こす

危険分子である、というような認識が、当時のローマ人の間にも芽生えていたのではないだろうか。

あるいは、ポッパエア・サビナのように、ファリサイ派やサドカイ派のユダヤ教徒と親しく交わっていた人たちは、彼らから「イエス・キリスト」を信じる一部の分派が、社会に分裂と混乱を引き起こす元凶であると知らされたのかもしれない。それゆえ、このような認識から、「イエス・キリスト」を信じる一派と放火犯のイメージが、容易に結びつきやすかったのではないかと考えられる<sup>(35)</sup>。

結論として、ネロのキリスト教徒迫害は、Christiani (或いは Christianoi—ギリシア語) に対する迫害というより、むしろ「世界中に騒動を引き起こしている」<sup>(36)</sup>、いわゆる「ナザレ人の分派」に対する迫害であったと言えるのではないだろうか。

## 注

- (1) 本稿は、2014年9月19日に同志社大学で開催されたキリスト教史学会第65回大会の研究発表の報告に、加筆・修正を加えたものである。
- (2) ネロのキリスト教迫害に関する研究は数多い。日本の研究としては、秀村欣二『ネロ』(中公新書、1967年)、半田元夫『原始キリスト教史論考』(清水弘文堂、1972年)、弓削達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』(日本基督教団出版局、1984年)などがある。最近では保坂高殿『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』(2003年、教文館)が詳細な研究を行っている。
- (3) このローマ大火の原因として、タキトゥスは偶然か、ネロの策略か不明としているが(『年代記』15.38)、スエトニウス(『ネロ伝』38.1)、ディオ・カッシウス(『ローマ史』62.16.1-2)は、ネロが放火犯と断定している。しかし現代の大半の研究者は、ネロ放火犯説を否定している(E. Champlin, *Nero*, London, 2003, pp.182-185; M. T. Griffin, *Nero: the End of Dynasty*, London, 1984, pp.132-133; D. Shotter, *Nero*, London and New York, 1997, p.53; B. H. Warmington, *Nero: Reality and Legend*, London, 1981, pp.123-124; G. ヴァルテル、山崎庸一郎訳『ネロ』みすず書房、1967、173-175頁; 秀村欣二『ネロ』中

- 公新書、1967、122~125頁；P. ファンデンベルク、平井吉夫訳『ネロ』河出書房新社、1990、245~251頁。
- (4) タキトゥス、国原吉之助訳『年代記（下）』岩波文庫、1981年、269~270頁。タキトゥスの記述については、弓削達、前掲書94~112頁。保坂高殿、前掲書264~284頁。
- (5) 国原訳は「結びつけられた (coniuncti)」と訳されているが、coniuncti よりも convicti の読みの方がよいので、「有罪とされた」と訳した。
- (6) Sed non ope humana, non largitionibus principis aut deum placamentis decedebat infamia, quin iussum incendium crederetur. Ergo abolendo rumori Nero subdidit reos et quaetissimus poenis adfecit, quos per flagitia invisos vulgus Christianos appellabat. Auctor nominis eius Christus Tiberio imperitante per procuratorem Pontium Pilatum supplicio adfectus erat; repressaque in praesens exitiabilis superstitio rursum erumpebat, non modo per Iudaeam, originem eius mali, sed per urbem etiam, quo cuncta undique atrocitas aut pudenda confluunt celebranturque. Igitur primum correpti qui fatebantur, deinde indicio eorum multitudo ingens haud perinde in crimine incendii quam odio humani generis convicti sunt. Et pereuntibus addita ludibria, ut ferarum tergis confecti laniatu canum interirent, aut crucibus adfixi aut flammandi, atque ubi defecisset dies, in usum nocturni luminis urerentur. Hortos suos ei spectaculo Nero obtulerat et circense ludicrum edebat, habitu aurigae permixtus plebi vel curriculo insistent. Unde quamquam adversus sontis et novissima exempla meritis miseratio oriebatur, tamquam non utilitate publica, sed in saevitiam unius absumerentur.
- (7) これについては島創平「『多神教』社会の中の「一神教」—ローマ帝国支配とユダヤ教・キリスト教」地中海文化を語る会編『ギリシア・ローマ世界における他者』彩流社、2003年、331~354頁参照。
- (8) 保坂、前掲書193頁。使徒言行録11章26節によると、「キリスト教徒 (Christianoi)」という呼称はアンティオキアで始まったとされており、その時期は一般に40年代と推定されている。一方保坂氏は、「キリスト教徒」という呼称は、異邦人の信徒をユダヤ人の信徒から区別するた
- めに生みだされたもので、その成立年代はユダヤ戦争期あたりではないかと推定している（前掲書184~223頁）。
- (9) タキトゥスは、ユダヤ教については「古い伝統で正当性が認められる」と認識している（『同時代史』5.5）。当時の人々にとって、先祖伝来の古い伝統を持つ宗教であることが、その宗教の正統性の条件の一つであった。例えばプルタルコス、ある宗教の正しさは、理性で論じられるべきものではなく、先祖伝来以来の古い信仰だけで十分であると述べている（『愛をめぐる対話』756A~C.）。一方、新しい宗教は、社会秩序を乱すものとして警戒され、危険思想視された（J. G. Cook, *Roman Attitudes Toward the Christians*, Tübingen, 2011, p.4~10.）。
- (10) 保坂、前掲書280頁。なお、当時のローマ市内におけるユダヤ人の人口は、およそ1万5千~2万人くらいではないかと思われる。また、1~2世紀初頭のローマ帝国全土内のキリスト教徒の数については、ある研究者の推定によると、40年頃で約1,000人、50年頃1,400人、100年頃で7,400~7,500人程度と考えられる（R. Stark, *The Rise of Christianity*, Princeton, 1996, pp.6~7; K. Hopkins, “Christian Number and Its Implications”, *Journal of Early Christian Studies*, 6:2 (1998), pp.185~226）。当時のローマ帝国の全人口は、およそ5千万人、また、ユダヤ人の数は数百万と推定されている（ローマ帝国内のユダヤ人の人口についてはB. McGing, “Population and Proselytism—How many Jews were there in the ancient world?”, J. R. Bartrett (ed), *Jews in the Hellenistic and Roman Cities*, London, and New York, 2002, pp.88~106.）。
- (11) フラウィウス・ヨセフスは38年生まれで、ネロより1年年下である。
- (12) Νέρων δὲ διακούσας αὐτῶν οὐ μόνον συνέγνω περὶ τοῦ πραχθέντος, ἀλλὰ καὶ συνεχώρησεν ἕαν οὕτως τὴν οἰκοδομίαν, τῇ γυναικὶ Ποππαίᾳ,<sup>1</sup> θεοσεβῆς γὰρ ἦν, ὑπὲρ τῶν Ἰουδαίων δεηθείσῃ χαριζόμενος, ἣ τοῖς μὲν δέκα προσέταξεν ἀπιέναι,<sup>2</sup> τὸν δ' Ἑλκίαν καὶ τὸν Ἰσ-μάηλον ὀμηρεύουσας παρ' ἐαυτῇ κατέσχεν.
- ヨセフス、秦剛平訳『ユダヤ古代誌6』ちくま学芸文庫、2000年、290頁。
- (13) ヨセフス、秦剛平訳『自伝』山本書店、1978年、46~48頁。
- (14) このようなユダヤ教の半改宗者として、使徒言行録10章に出てくるローマ軍の百人隊長であ

- るコルネリウス一家が、その一例として考えられる（使徒言行録 10 章 2 節）。「神を畏れる人」については保坂、前掲書、201~203 頁参照。
- (15) タキトゥス『年代記』 13.45~47, 14.1, 14.61.
- (16) タキトゥス『同時代史』 1.22.
- (17) E. M. Smallwood, *Documents Illustrating the Principates of Gaius, Claudius and Nero*, Cambridge, 1967, no. 24; M. H. Williams, “Teosebês gar ên—The Jewish Tendencies of Poppaea Sabina”, *Journal of Theological Studies* 39 (1988), p.104.
- (18) タキトゥス『年代記』 16.6; Champlin, *op. cit.*, p. 105.
- (19) E. M. Smallwood, “The Alledged Jewish Tendencies of Poppaea Sabina”, *Journal of Theological Studies*, N. S. 10 (1959), pp.329~335. これに対する批判は Williams, *op. cit.*, pp.97~111.
- (20) 例えば、黒海沿岸のボスポロス王国のユダヤ人のシナゴークにおける奴隷解放碑文には、「ゼウス、大地（ゲー）、太陽（ヘリオス）」という異教の神々が言及されている（鳥創平「パウロと奴隷解放の問題—コリント前書七章二節の歴史的背景」『史潮』新 13（1983）、64~87 頁）。また各地のシナゴークにおいては、シナゴークの床面に、星座の黄道十二宮や、太陽神ソル・インウィクトゥスの像などが描かれている例が見られる（関谷定夫『シナゴーク—ユダヤ人の心のルーツ』リトン、2006 年；豊田浩志「古代末期ユダヤ教図像考—セフォリスの新発見シナゴーク舗床モザイク図像をめぐって（1）」『上智史学』47（2002）、87~120 頁）。
- (21) 一例として、ルカによる福音書 7 章 1 節以下で登場するローマ軍の百人隊長について、ユダヤ人の長老たちは、イエスに「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです（ルカによる福音書 7 章 4~5 節）」と述べている。
- (22) B. J. Broton, *Women Leaders in the Ancient Synagogue*, Chico (California), 1982, pp.144, 158.
- (23) Τὸν κατασκευασθέντα οἶκον ὑπὸ Ἰουλίας Σευήρας· Π(οπιλίου) Τυρρώνιος Κλαύδος, ὁ διὰ βίου ἀρχισυνάγωγος καὶ Λουκίος Λουκίου ἀρχισυνάγωγος καὶ Ποπιλίου Ζωτικὸς ἀρχὼν ἐπέσκειυσαν ἐκ τε τῶν δίδων καὶ τῶν συνκαταθεμένων καὶ ἐγράψαν τοὺς τοίχους καὶ τὴν ὁροφὴν καὶ ἐποίησαν τὴν τῶν θυρίδων ἀσφάλειαν καὶ τὸν λυπὸν πάντα κόσμον, οὐστίνας καὶ ἡ συναγωγὴ ἐτείμησεν ὅπλῳ ἐπιχρύσῳ διὰ τὴν ἐνδρετον αὐτῶν δ[ι]άθ[ε]σιν καὶ τὴν πρὸς τὴν συναγωγὴν εὐνοιδίαν τε καὶ σπουδήν.
- (24) この碑文の中で、「シナゴークの頭 (archisunagôgos)」(新約聖書では「会堂長」と訳されている)として名前を挙げられている人たちは、恐らくユリア・セウエラの解放奴隷であろうと推定される。
- (25) M. T. Griffin, *op. cit.*, p. 133.
- (26) 使徒言行録 13 章 5 節 (キプロス)、13 章 14 節 (ピシディアのアンティオキア)、16 章 13 節 (フィリピ)、17 章 2 節 (テサロニケ)、17 章 17 節 (アテネ)、18 章 4 節 (コリント) など。
- (27) 使徒言行録 18 章 6 節 (コリント)、28 章 25~28 節 (ローマ)。なお、第 1 回伝道旅行でピシディアのアンティオキアで、パウロはユダヤ人から異邦人への方向転換を宣言しながら (13 章 47~47 節)、次に訪れたイコニオンでは、再び「ユダヤ人の会堂」で伝道を始めている (17 章 1 節)。
- (28) J. Jervell, *The Theology of the Acts of the Apostles*, Cambridge, 1996, p. 85.(J. イェルヴェル著、挽地茂男訳『使徒言行録の神学』新教出版社、1999 年)
- (29) 使徒言行録 13 章 49~50 節 (ピシディアのアンティオキア)、14 章 19~20 節 (リストラ)、17 章 13 節 (テサロニケ)、18 章 12~17 節 (コリント)、19 章 21~40 節 (エフェソ) など。
- (30) Jervell, *op. cit.*, p. 17.
- (31) 保坂氏は、「全ユダヤ人の追放」という使徒言行録の記述は非現実的で不正確であると言う（保坂、前掲書 251 頁）。
- (32) Iudaios impulsore Chresto assidue tumultuantis Roma expulsi.
- (33) S. Benko, *Pagan Rome and the Early Christians*, Bloomington, 1984, pp. 18~19.
- (34) 保坂前掲書 255~257 頁；Cook, *op. cit.*, pp.11~28.
- (35) これに関連して、ヨセフスによると 67 年、シリアのアンティオキアで、ユダヤ人が放火の陰謀を企てているという罪が帰せられ、その後実際に火災が発生し、多くのユダヤ人が迫害され、殺されたという（『ユダヤ戦記』7.46~62.）。保坂、前掲書 207 頁。



(36) 使徒言行録 24 章 5 節.

## 主要参考文献

### ①邦文文献

- ・ G. ヴァルテル、山崎庸一郎訳『ネロ』みすず書房、1967 年
- ・ 島 創平『初期キリスト教とローマ社会』新教出版社、2001 年
- ・ 島 創平「『多神教』社会の中の「一神教」ーローマ帝国支配とユダヤ教・キリスト教」地中海文化を語る会編『ギリシア・ローマ世界における他者』彩流社、2003 年、331~354 頁
- ・ 新保良明『ローマ帝国愚帝列伝』講談社選書メチエ、2000 年
- ・ スエトニウス、国原吉之助訳『ローマ皇帝伝』岩波文庫、1986 年
- ・ タキトゥス、国原吉之助訳『年代記』岩波文庫、1981 年
- ・ 半田元夫『原始キリスト教史論考』清水弘文堂、1972 年
- ・ 秀村欣二『ネロ』中公新書、1967 年
- ・ P. ファンデンベルク、平井吉夫訳『ネロ』河出書房新社、1990 年
- ・ 保坂高殿『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』教文館、2003 年
- ・ 弓削 達『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』日本基督教団出版局、1984 年
- ・ ヨセフス、秦剛平訳『自伝』山本書店、1978 年
- ・ ヨセフス、秦剛平訳『ユダヤ古代誌』ちくま学芸文庫、2000 年

### ②欧文文献

- ・ S. Benko, *Pagan Rome and the Early Christians*, Bloomington, 1984.
- ・ B. J. Brooten, *Women Leaders in the Ancient Synagogue*. Chico (California), 1982.
- ・ E. Champlin, *Nero*, London, 2003.
- ・ J. G. Cook, *Roman Attitudes Toward the Christians*, Tübingen, 2011.
- ・ J. Elsner and J. Masters (eds.), *Reflections of Nero*, Chapell Hill and London, 1994.
- ・ M. T. Griffin, *Nero: the End of a Dynasty*, London, 1984.
- ・ J. Jervell, *The Theology of the Acts of the Apostles*, Cambridge, 1996. (J. イエルヴェル著、挽地茂男訳『使徒言行録の神学』新教出版社、1999 年)

- ・ D. Shotter, *Nero*, London and New York, 1997.
- ・ E. M. Smallwood, "The Alleged Jewish Tendencies of Poppaea Sabina," *Journal of Theological Studies* N. S., 10 (1959), pp.329~335.
- ・ B. H. Warmington, *Nero: Reality and Legend*, London, 1981.
- ・ M. H. Williams, "Theosebês gar ên —The Jewish Tendencies of Poppaea Sabina," *Journal of Theological Studies* 39 (1988), pp.97~111.